



CSJ 化学フェスタが拓く 化学と科学技術の未来

●
加藤隆史 Takashi KATO

信州大学 特任教授・岡山大学 特任教授・東京大学 名誉教授、第16回CSJ化学フェスタ実行委員長



“日本の化学と日本を皆で協働して元気に”という多くの方の想いから2011年に始まった日本化学会秋季事業CSJ化学フェスタは、2026年10月に第16回目を迎える。原子・分子の基礎から身近な応用までという幅の広さと多面的な様相を有することが化学の魅力である。このことを共有するべく、様々な出し物に多様な方が参加して楽しむ「お祭り：フェスタ」をイメージして企画・運営を行っている。化学におけるサイエンスとテクノロジーの産学官による深耕，中長期的な視野に立った人材育成，化学の社会への発信などを掲げている。毎年3000人程度（参加校：130校；産官参加機関：200機関）に参加していただき、コンパクトな素晴らしい1つの会場（江戸川区タワーホール船堀）で様々なバックグラウンドを持つ方々が強く融合・相互作用して一緒に化学を考えている。個性ある多様な企画が多くの皆様のご協力の下に展開され、日本化学会を代表する行事の1つとなった。学会の基本的内容を持つ春季年会と比べると特徴の異なる良い対の組み合わせとなっている。運営の特色は産学官からの90名近い委員と事務局が1年間かけて議論・準備してフェスタを作り上げていることである。委員長も産と学から1人ずつである（産から本年は山田泰司氏）。企画の詳細は本号【「化学と工業」2026年79巻9号】の特集ページをご参照いただきたい。

フェスタの中で、大きな特徴の1つが企業からのR&Dブースと学生のポスター発表の「同居」である。会場の1階のホールでは3日間にわたり企業や公的機関の研究者による研究開発の紹介（就職案内ではない）（毎年30機関以上）と、学生の約1000件のポスター発表が同時に行われており、まさに融合した状態である。学生ポスター発表審査においては、1件当たり2名が学界から1名が産業界から総計約500名（その内産から150名以上）の全国の皆様に引き受けていただき、これが学生と外の世界の重要なコミュニケーションとなっている。学生に大変好評である。特に産業界審査員の皆様には一企業の立場を超えた化学オールジャパンの先輩としての視点を持って参加いただいている。さらに、博士課程の学生を励ます目的でポスターに加えた博士オーラルという口頭発表の場も設けた。本年からすべて英語である。夕方からの交流会にも400名以上の学生が参加して下さり賑やかである。皆さん本当に楽しそうにポスターでも交流会でも対面で生き生きと議論しておられる。このようなそれぞれの立場を基本的に持ちながらの融合を意識した取り組みは全体としての長期的な価値を生んでいくと考える。我が国には原油・鉱物などの資源確保問題があるが、人材の資源と化学および科学の未来はまさにここにある。最近、「フェスタで発表しました」と声を掛けて下さる社会で活躍中のポスター発表経験者も多い。このような様々なフェスタの試行錯誤は続いている。CSJ化学フェスタに日本における学問と社会・産業のかかわり方そして未来の新しいヒントがあるかもしれない。

新分野の創成や飛躍的な進歩は、歴史的に新しい出会いによる例が極めて多い。日頃、自分のテーマを深く掘り下げている研究者・技術者が、フェスタでより広い観点を知り、さらに、様々な意味での価値の創造と問題解決に、CSJ化学フェスタがますます貢献していくことを期待したい。

© 2026 The Chemical Society of Japan